

取舵

泉鏡花

青空文庫

上

「こりやどうも厄介だねえ。」

観音丸の船員は累々しき盲翁の手を執りて、舁より本船に扶乗する時、かくは呟きぬ。

この「厄介」とともに送られたる五七人の乗客を載了りて、観音丸は徐々として進行せり。

時に九月二日午前七時、伏木港を発する観音丸は、乗客の便を謀りて、午後六時までに越後直江津に達し、同所を発する直江津鉄道の最終列車に間に合すべき予定なり。

この憐むべき盲人は肩身狭げに下等室に這込みて、厄介ならざらんように片隅に踞りつ。人ありてその齢を問ひしに、渠は皺喰れたる声して、七十八歳と答えき。

盲にして七十八歳の翁は、手引をも伴れざるなり。手引をも伴れざる七十八歳の盲の翁は、親不知の沖を越ゆべき船に乗りたるなり。衆人はその無法なるに愕けり。

渠は手も足も肉落ちて、赭黒き皮のみぞ骸骨を裹みたる。軀低く、頭禿げて、式ば

かりの鬚に結いたる十筋右衛門は、略画の鴉の翻るに似たり。眉も口も鼻も取立てて謂うべき所あらず。頬は太く瘦けて、眼は然と陥みて盲いたり。

木綿袴の條柄も分かぬまでに着古したるを後褰にして、継々の股引、泥塗の脚絆、煮染めたるばかりの風呂敷包を斜めに背負い、手馴したる白櫛の杖と一蓋の菅笠とを膝の辺りに引寄せつ。産は加州の在、善光寺詣の途なる由。

天氣は西の方曇りて、東晴れたり。昨夜の雨に甲板は流るるばかり濡れたれば、乗客の多分は室内に籠りたりしが、やがて日光の雲間を漏れて、今は名残無く乾きたるにぞ、蟄息したりし乗客等は、先を争いて甲板に踰れたる。

観音丸は船体小にして、下等室は僅に三十余人を容れて肩摩すべく、甲板は百人を居きて余あるべし。されば船室よりは甲板こそ乗客を置くべき所にして、下等室は一個の溷熱き窖廩に過ぎざるなり。

この内に留りて憂目を見るは、三人の婦女と厄介の盲人とのみ。婦女等は船の動くとも船暈を発して、かつ嘔き、かつ呻き、正体無く領伏したる髪の乱に汚穢を塗らして、半死半生の間に苦悶せり。片隅なる盲翁は、毫も悩める気色はあらざれども、話相手もあらで無聊に堪えざる身を同じ枕に倒して、時々南無仏、南無仏と小声に唱

みよう
名せり。

ばつびよう
拔 錨 後二時間にして、船は魚津に着きぬ。こは富山県の良港にて、運輸の要地なれば、観音丸は貨物を積まむために立寄りたるなり。

来るか、来るかと浜に出て見れば、浜の松風音ばかり。

ろせい
櫓声に和して高らかに唱連れて、越中米を満載したる五六艘の船は漕寄せたり。

儀の数は約二百俵、五十石内外の米穀なれば、機関室も甲板の空処も、隙間なきまでに積みたる重量のために、船体はやや傾斜を来して、吃水は著しく深くなりぬ。

儀はほとんど船室の出入口をも密封したれば、さらぬだに鬱燠たる室内は、空氣の流通を礙げられて、窖廩はついに蒸風呂となりぬ。婦女等は苦悶に苦悶を重ねて、人心地を覚えざるもありき。

睡りたるか、覚めたるか、身動きもせで臥したりし盲人はやにわに起上りて、

「はてな、はてな。」と首を傾けつつ、物を索むる氣色なりき。側に在るは、さばかり打悩める婦女のみなりければ、渠の壁訴訟はついに取挙げられざりき。盲人は本意無げに呟けり。

「はてな、小用場はどこかなあ。」

なお応ずる者のあらざりければ、渠は困じ果てたる面色にてしばらく黙せしが、やがて臆したる声音にて、

「はい、もし、誠に申兼ねましたが、小用場はどこでございまいしょうかなあ。」

渠は頸を延べ、耳を欹てて誨を俟てり。答うる者はあらで、婦女の呻く声のみ微微々と聞えつ。

渠は居去りつつ捜寄れば、袂ありて手頭に触れぬ。

「どうも、はや御面倒でございますが、小用場をお教えなすつて下さいまし。はい誠に不自由な老夫でございます。」

渠は路頭の乞食の如く、腰を屈め、頭を下げ、憐を乞えり。されどもなお応ずる者はあらざりしなり。盲人はいよいよ途方に暮れて、

「もし、どうぞ御願でございます。はいどうぞ。」

おずおずその袂を曳きて、惻隠の情を動かさむとせり。打俯したりし婦人は蒼白き顔をわずかに擡げて、

「ええ、もう知りませんよう！」

酷くも袂を振払いて、再び自家の苦悩に悶えつ。盲人はこの一喝に挫がれて、頸を竦

め、肩を窄めて、

「はい、はい、はい。」

中

甲板より 帰 来れる一個の学生は、室に入るよりその溽熱に辟易して、

「こりや劇い！」と眉を顰めて四辺をせり。

狼藉に遭えりし死骸の棄てられたらむように、婦女等は算を乱して手荷物の中に横われり。

「やあ、やあ！ 惨憺たるものだ。」

渠はこの惨憺さと溽熱さとに面を皺めつつ、手荷物の中より何やら取出して、忙々立去らむとしたりしが、たちまち左右を顧て、

「皆様、これじや耐らん。ちと甲板へお出でなさい。涼しくツてどんなに心地が快か知れん。」

これ空谷の跫音なり。盲人は急遽声する方に這寄りぬ。

「もし旦那様、何ともはや誠に申兼ねましてございますが、はい、小用場へはどちらへ参りますでございますか、どうぞ、はい。……」

盲人は数多渠の足下に叩頭きたり。

学生は渠が余りに礼の厚きを訝りて、

「うむ、便所かい。」とその風体を眺めたりしが、

「ああ、お前様不自由なんだね。」

かくと聞くより、盲人は飛立つばかりに懼びぬ。

「はい、はい。不自由で、もう難儀をいたします。」

「いや、そりや困るだろう。どれ僕が案内してあげよう。さあ、さあ、手を出した。」

「はい、はい。それはどうも、何ともはや、勿体もない、お難有う存じます。ああ、

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。」

優しくも学生は盲人を扶けて船室を出でぬ。

「どっこい、これから階子段だ。気を着けなよ、それ危い。」

かくて甲板に伴いて、渠の痛入るまでに介抱せし後、

「爺様、まあここにお坐り。下じや耐らない、まるで釜烹だ。どうだい、涼しかろ。」

「はい、はい、難^{ありがと}有うございます。これは結構で。」

学生はその側^{かたわら}に寝転びたる友に向いて言えり。

「おい、君、最少^{もすこ}しそっちへ寄ツた。この爺^{じいさん}様に半座^{はんざ}を分けるのだ。」

渠^{かれ}は快くその席を譲りて、

「そもそも半座^{はんざ}を分けるなどとは、こういう敵手^{あいて}に用^{つか}う易^{やす}い文句じやないのだ。」

かく言いてその友は投出^{ひぎ}したる膝を拊^うてり。学生は天を仰ぎて笑えり。

「こんな時にでも用^{つか}わなくツちや、君なんぎ生涯^{つか}用^{つか}う時は有りやしない。」

「と先言^{まず}ツて置^おくさ。」

盲人^{めしい}はおそろおそろその席に割^{わり}入^こみて、

「はい真平^{まつびら}御免^{ごめん}下さいまし。はい、はい、これはどうも、お蔭^{かげ}様で助かります。いや、

これは氣持^{きよ}の快^よい、とんと極樂でございます。」

渠^{かれ}は涼風^{きようふう}の來^{きた}ることに念仏^{ひそ}して、心竊^{ひそ}かに学生の好意^{しや}を謝^{しゃ}したりき。

船室^{せんしつ}に在^ありて憂目^{うきめ}に遭^あいし盲^{めくら}翁^{おやじ}の、この極樂^{ごくらく}淨土^{じやうど}に仏^{ほとけ}性の恩人^{しやう}と半座^{はんざ}を分

つ歡喜^{よろこび}のほどは、著^{しる}くもその面貌^{おももち}と挙動^{きやうどう}とに露^{あらわ}れたり。

「はい、もうお蔭^{おやじ}様で老夫^{らふ}め助^{すけ}かります。こうして眼も見えませぬ癖^{くせ}に、大胆^{だたん}な、单独^{ひとり}

で船なんぞに乗りまして、他様に御迷惑を掛けます。」

「まったくだよ、爺様。」

と学生の友は打笑いぬ。盲人は面目なげに頭を撫でつ。

「はい、はい、御尤で。実は陸を参ろうと存じましてございましたが、ついこの年者と申すものは、無闇と氣ばかり急きたがるもので、一時も早く如来様が拝みたさに、こんな不了簡を起しまして。……」

「うむ、無理はないさ。」と学生は頷きて、

「何も目が見えんからといって、船に乗られんという理窟はすこしもない。盲人が船に乗るくらいは別に驚くことはないよ。僕は盲目の船頭に邂逅したことがある。」

その友は渠の背に一撃を吃して、

「吹くぜ、お株だ！」

学生は躍起となりて、

「君の吹くぜもお株だ。實際ださ、實際僕の見た話だ。」

「へん、蹩の人力挽、唾の演説家に雀盲の巡査、いずれも御採用にはならんから、そう思い給え。」

「失敬な！ うそだと思うなら聞き給うな。僕は単独で話をする。」

「単独で話をするとは、覺悟を極めたね。その志に免じて一條聞いてやろう。その代り葺を一本。……」

眼鏡越しに学生は渠を悪さげに見遣りて、

「その口が憎いよ。何もその代りと言わんでも、与れなら与れと。……」

「与れ！」と渠はその掌を学生の鼻頭に突き出せり。学生は直にパイレットの函を投付けたり。渠はその一本を抽出して、燐枝を袂に搜りつつ、

「うむ、それから。」

「うむ、それからもないもんだ。」

「まあそう言わずに折角話したまえ。謹聴々々々。」

「その謹聴のきんの字は現金のきんの字だろう。」

「未だ詳ならず。」とその友は頭を掉りぬ。

「それじゃその葺を喫んで謹聴し給え。」

去年の夏だ、八田瀉ね、あすこから宇木村へ渡つて、能登の海浜の勝を探ろうと

思つて、家を出たのが六月の、あれは十日……だったかな。

渡場わたしばに着くと、ちようど乗合のりあいが揃そろつていたので、すぐに乗込のりこんだ。船頭ふなとうは未だ到いたりなかつたが、所ところの壮者わかいものだの、娘むすめだの、女房かみさん達たちが大勢おほいで働はたらいて、乗合のりあいに一箇ひとつずつ折おりをくれたと思おもひ給たまへ。見ると赤飯こわめしだ。」

「塩釜しおがまよりはいい。」とその友は容喙まげかえせり。

「謹聴きんちようの約束やくそくじゃないか。まあ聴きき給たまへよ。見ると赤飯こわめしだ。」

「おや。二個貫ふたつもらつたのか。だから近來ちかごろはどこでも切符きふを出すのだ。」

この饒舌じようぜつを懲こらさんとて、学生がくせいは物をも言いわで拳こぶしを挙げあげぬ。

「謝あやまつた謝あやまつた。これから真面目まじめに聴きく。よし、見ると赤飯こわめしだ。それは解わかつた。」

「そこで……」

「食たつたのか。」

「何を？」

「いや、よし、それから。」

「これはどういふ事実じじつだと聞きくと、長年わたくしこの渡わたしをやっていた船頭ふなとうが、もう年を取とつたから、今度むすこ息子むすこに艀ろを譲ゆづつて、いよいよ隠居いんきよをしようという、この日ひが老船頭らふなとう、一世いつせ一代いちだいの漕納こぎおさめだというんだ。面白おもしろかろう。」

渠かれの友は嗤せせ笑わらいぬ。

「赤飯こわめしを貰もらったと思つてひどく面白がるぜ。」

「こりや怪けしからん！ 僕が赤飯こわめしのために面白がるなら、君なんぞは難有ありがたがつていいのだ。」

「なぜなぜ。」と渠かれは起おき回かえれり。

「その葉卷はまきはどうした。」

「うむ、なるほど。面白い、面白い、面白い話だ。」

渠かれは再び横になりて謹きん聴ちやうせり。学生は一いつ笑しょうして後件のちだんの譚はなしを続けたり。

「その祝いわいの赤飯こわめしだ。その上に船賃ふなちんを取らんだ。乗合のりあいもそれは目出度めでたいと言うので、いくらか包んで与やる者もあり、即吟そくぎんで無理に一句浮べる者もありさ。まあ思い思いに祝いわつてやつたと思おもいたまへ。」

例の饒舌先生はまた呶々どどせり。

「君は何を祝つた。」

「僕か、僕は例の敷島しきしまの道さ。」

「ふふふ、むしろ一つの癖くせだろう。」

「何か知らんが、名歌だつたよ。」

「しかし伺^{うかが}おう。何と言うのだ。」

学生はしばらく沈^{ちんし}思^しせり。その間に「年波^{としなみ}」、「八重の潮路^{しおじ}」、「渡守^{わたしもり}」、「心なるらん」などの歌^{うた}詞^{ことば}はきれぎれに打誦^{うちずん}ぜられき。渠^{かれ}はおのれの名歌を忘^{ぼう}却^{きやく}したるなり。

「いや、名歌^{めいか}はしばらく預^よッておいて、本文^{ほんもん}に懸^かろう。そうこうしているうちに船頭^{かづな}が出て来た。見ると疲曳^{よぼよぼ}の爺様^{じいさん}さ。どうで隠居^{いんきよ}をするというのだから、老^{とし}者^{より}は覚悟^{かくご}の前^{まへ}だツたが、その疲曳^{よぼよぼ}が盲^{めくら}なものには驚いたね。

それがまた勘^{かん}が悪いと見えて、船着^{ふなつき}まで手を牽^ひかれて来る始末^{ひか}だ。無途^{むてつ}方^{ぽう}も極^きれりというべしじやないか。これで波の上^{なみのうへ}を漕^こぐ気^きだ。皆呆^{みんなき}れたね。険難^{けんなん}千^{せん}方^{ばん}な話^わさ。けれども瀾^{かた}の事^{こと}だから川^{かわ}よりは平穩^{まじか}だから、万^{まん}一^{いつ}の事^{こと}もあるまい、と好^{この}事^じな連^{れん}中^{じゅう}は乗^のっていたが、遁^にげた者^{もの}も四五人^{四五人}は有^あツたよ。僕^{わが}も好^{この}奇^き心^{しん}でね、話^わの種^{たね}だと思^{おも}ツたから、そのまま乗^のつて出るとまた驚いた。

実^{じつ}に見^みせたかツたね、その疲曳^{よぼよぼ}の盲者^{めくら}がいざと言^いツて櫓柄^{ろづか}を取ると、佗^{しや}然^{つきり}としたものだ、まるで別人^{べにん}さね。なるほどこれはその道^{みち}に達^たしたものだ、と僕^{わが}は想^{おも}ツた。もとよ

りあのくらのいゝ潟^{かた}だから、誰だつて漕^こげるさ、けれどもね、その体度^{たいど}だ、その氣力^{きあい}だ、猛^も將^{うしよう}の戦^{たたかい}に臨^ぞんで馬上^{さくよこた}に架^さを横^{よこ}えたと謂^いつたような、凜^{りん}然^{ぜん}として奪^{うば}うべからざる、いや実にその立派^{りつぱ}さ、未だに僕は忘れんね。人が難^{わけ}のない事を（眠^ねつていても出来る）と言^いうが、その船頭^{せんとう}は全くそれなのだ。よく聞いて見ると、その理^はき。この疲^{よほ}曳^{よほ}の盲^{めくら}者を誰^{たれ}とか為^なす！ 若い時には錢屋^{ぜにや}五兵衛^{ごへい}の抱^{かか}え、年中千五百石^{ちくづみ}積^{つみ}を家として、荒海^{こうかい}を漕^こ廻^{まわ}していた曲^く者^{もの}なのだ。新潟^{しんがた}から直江津^{ちくえつ}ね、佐渡^{さど}辺^{あたり}は持^{もち}場^ばであつたそうさ。中^{ちゅう}年^{ねん}から風^{ふう}眼^{がん}を病^{わづ}らつて、盲^{つぶ}れたんだそうだが、別に貧乏^{へんぷつ}というほどでもないのに、舟^{ふね}を漕^こがんと飯^{めし}が旨^{うま}くないという変^{へん}物^{ぶつ}で、疲^{よほ}曳^{よほ}の盲^{めくら}目^めで在^いながら、つまり洒落^{しゃれ}半分^{はんぶん}に渡^{わた}をやつていたのさ。

乗^{のり}合^{あい}に話^{はなし}好^{ずき}の爺^{じい}様^{さん}が居^いて、それが言^いつたよ。上手^{こう}な船頭^{せんとう}は手先^{てさき}で漕^こぐ。巧^{こう}者^{しゃ}なのは眼^{がん}で漕^こぐ。それが名人^{めいじん}となると、肚^{はら}で漕^こぐ。これは大^おいにそうだろう。沖^{はな}で暴^{はや}風^{ふう}でも吃^くつた時には、一寸^{いっしん}先^{さき}は闇^{やみ}だ。そういう場合には名人^{めいじん}は肚^{はら}で漕^こぐから確^{たしか}さ。

生^{あいに}憎^{にく}この近眼^{きんがん}だから、顔^{かほ}は瞭^{はつきり}然^{ぜん}見えなかつたが、唾^{くわえ}煙^{えん}管^{くわん}で艫^{おちつき}を押^おすその持^{もち}重^{じゆう}加^か減^{げん}！ あつぱ^{あつぱ} 適^{あつぱ}れ見^み物^{もの}だつたよ。一

饒^{じようぜつ}舌^{ぜつ} 先生^{せんせい}も遂^{つひ}に口^{くち}を噤^{つぶ}みて、そぞろに興^{きよう}を催^{もよお}したりき。

下

魚津うおづより三日市みつかいち、浦山うらやま、船見ふなみ、泊とまりなど、沿岸の諸駅しよえきを過ぎて、越中越後の境なる関せきという村を望むまで、陰晴いんせいすこぶる常ならず。日光の隠顯いんけんするごとに、天の色はあ
るいは黒く、あるいは蒼あおく、濃緑こみどりに、浅葱あさぎに、朱しゆのごとく、雪のごとく、激しく異状を
示したり。

邇ちかく水陸かぎを画れる一帯の連山中に崛起くつきせる、御神樂嶽飯豊山おかぐらがたけいとよきんの腰を十重二十重に縈めぐ
れる灰汁あくのごとき靄もやは、揺曳ようえいして巔いただきに騰り、見る見る天上に蔓はびこりて、怪物などの今や時
を得んずるにはあらざるかと、いと凄すさまじき気色けしきなりき。

元来伏木直江津間の航路の三分の一は、遙はるかに能登半島の庇護ひごによりて、辛からくも内海うちうみを
形かたち成つくれども、泊とまり以東は全く洋々たる外海そとうみにて、快晴の日は、佐渡島の模糊もこたるを見
るのみなれば、四面しめん森びようぼう茫ぼうとして、荒波山の崩るるごとく、心こころ易やすかる航行は一年
中半日も有あり難がたきなり。

さるほどに汽船の出発は大事を取りて、十分に天氣を信ずるにあらざれば、解纜かいらんを見

合すをもて、却りて危険の虞寡しと謂えり。されどもこの日の空合は不幸にして見謬
 られたりしにあらざるなきか。異状の天^{てん}色^{しよく}はますます不穩^{ふおん}の徴^{ちよう}を表せり。

一時魔鳥の翼と翔りし黒雲は全く凝^{ぎよう}結^{けつ}して、一髪を動かすべき風だにあらず、
 気圧は低落して、呼吸の自由を礙^{さまた}げ、あわれ肩をも抑うるばかりに覺えたりき。

疑うべき静穩^{せいおん}！ 異むべき安恬^{あんとん}！ 名だたる親不知^{おやしらず}の荒磯に差懸^{さしか}りたるに、船
 体は微動だにせずして、暈^{たみ}の上を行くがごとくなりき。これあるいはやがて起らんずる天
 変の大頓挫^{だいとんざ}にあらざるなきか。

船は十一分の重量あれば、進行極めて遅緩^{ちかん}にして、糸魚川^{いといがわ}に着きしは午後四時半、予
 定に後^{おく}るること約二時間なり。

陰^{いん}※たる空に覆^{おほ}れたる万^{ばん}象^{しやう}はことごとく愁^{うれ}いを含みて、海辺の砂山^{いぢじ}に著^いるき一点の
 紅^{くれな}は、早くも掲げられたる暴風警戒^{けいかい}の球^{きう}標^{ひよう}なり。さればや一艘^{そう}の伝馬^{てんま}も来らざりけ
 れば、五分間も泊^{とどま}らで、船は急進直江津に向えり。

すわや海上の危機は逼^{せま}ると覺^{おぼ}しく、あなたこなたに散在したりし数十の漁船は、北^{にぐ}るが
 ごとく漕^{こぎ}戻^{もと}しつ。観音丸^{かんのんまる}にちかづくものは櫓綱^{ろづな}を弛^{ゆる}めて、この異腹^{いふく}の兄弟の前途^{きつちか}を危
 わしげに目送^{もくそう}せり。

やがて遙に能生を認めたる辺にて、天色は俄に一変せり。——陸は甚だ黒く、沖は真白に。と見る間に血のごとき色は颯と流れたり。日はまさに入らんとせるなり。

ここ一時間を無事に保たば、安危の間を駛する観音丸は、恙なく直江津に着すべきなり。渠はその全力を尽して浪を截りぬ。団々として渦巻く煤烟は、右舷を掠めて、陸の方に頽れつつ、長く水面に横わりて、遠く暮色に雜わりつ。

天は昏として睡り、海は寂寥として声無し。

甲板の上は一時頗る喧擾を極めたりき。乗客は各々生命を氣遣いしなり。されども渠等は未だ風も荒まず、波も暴れざる当座に慰められて、坐臥行住思い思いに、雲を觀るもあり、水を眺むるもあり、遐を望むもありて、その心には各々無限の憂を懷きつつ、惕息して面をぞ見合せたる。

まさにこの時、衝と舳の方に踫れたる船長は、轟立して水先を打噴りぬ。俄然汽笛の聲は死黙を劈きて轟けり。万事休す！と乗客は割るるがごとくに響動きぬ。

観音丸は直江津に安着せるなり。乗客は狂喜の声を揚げて、甲板の上に躍れり。拍手は夥しく、観音丸万歳！船長万歳！乗合万歳！

八人の船子を備えたる舳は直ちに漕寄せたり。乗客は前後を争いて飛移れり。学生とそ

の友とはやや有りて出入口に踰れたり。その友は二人分の手荷物を抱えて、学生は例の厄介者を世話して、舢に移りぬ。

舢は鎖を解きて本船と別る時、乗客は再び観音丸と船長との万歳を唱えぬ。甲板に立てる船長は帽を脱して、満面に微笑を湛えつつ答礼せり。舢は漕出した。陸を去る僅に三町、十分間にして達すべきなり。

折から一天俄に搔曇りて、と吹下す風は海原を揉立つれば、船は一丈も支えず矢を射るばかりに突進して、無二無三に沖合へ流されたり。

舢櫓を押せる船子は慌てず、躁がず、舞上げ、舞下る浪の呼吸を量りて、浮きつ沈みつ、秘術を尽して漕ぎたりしが、また一時暴増る風の下に、瞻るばかりの高浪立ちて、ただ一呑と屏風倒に頽れんずる凄じさに、剛氣の船子も啊呀と驚き、腕の力を失う隙に、舢はくるりと波に曳れて、船は危く傾きぬ。

しなしたり！と渠はますます慌てて、この危急に処すべき手段を失えり。得たりやと、波と風とはますます暴れて、この舢をば弄ばんと企てたり。

乗合は悲鳴して打騒ぎぬ。八人の船子は効無き櫓柄に縋りて、
「南無金毘羅大権現！」と同音に念ずる時、胴の間の辺に雷のごとき声ありて、

「取舵！」

舳櫓の船子は海上鎮護の神の御声に氣を奮い、やにわに艫をば立直して、曳々声を揚げて盪しければ、船は難無く風波を凌ぎて、今は我物なり、大権現の冥護はあるぞ、と船子はたちまち力を得て、ここを先途と漕げども、盪せども、ますます暴るる浪の勢に、人の力は限りありて、渠は身神全く疲労して、將に昏倒せんとしたりければ、船は再び危く見えたり。

「取舵！」と雷のごとき声はさらに一喝せり。半死の船子は最早神明の威令をも奉ずる能わざりき。

学生の隣に竦みたりし厄介者の盲翁は、この時屹然と立ちて、諸肌寛げつつ、「取舵だい!!」と叫ぶと見えしが、早くも舳の方へ転行き、疲れたる船子の握れる艫を奪いて、金輪際より生えたるごとくに突立ちたり。

「若い衆、爺が引受けた！」

この声とともに、船子は碇と僵れぬ。

一艘の厄介船と、八人の厄介船頭と、二十余人の厄介客とは、この一個の厄介物の手に因りて扶けられつつ、半時間の後その命を拾いしなり。この老いて盲なる活大

権現ごんげんは何者ぞ。渠かれはその壮時そうじにおいて加賀かがの銭屋内閣ぜにやないかくが海軍の雄将ゆうしようとして、北ほつ海の全権かいを掌しょうあく握あくしたりし磁石じしやくの又五郎またごろうなりけり。

青空文庫情報

底本：「新潟県文学全集 第1巻 明治編」郷土出版社

1995（平成7）年10月26日発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

初出：「太陽 創刊号」

入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース

校正：小林繁雄

2006年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

取舵

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>